

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 11 日現在

機関番号：12401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22520010

研究課題名（和文） 現代的本質主義の論理と存在論

研究課題名（英文） The Logic and Ontology of Contemporary Essentialism

研究代表者

加地 大介 (KACHI DAISUKE)

埼玉大学・教養学部・教授

研究者番号：50251145

研究成果の概要（和文）：

本質主義のいくつかのタイプに関する比較考察の結果、実在的定義に基づく定義的本質主義を基礎としつつも傾向本質主義と最小本質主義をも部分的に取り入れた「範疇的力能本質主義」を採用した。それに基づきつつ、擬似的実体としての穴と虹の実在的定義を試みた結果、前者を充填可能性という力能を有する依存的耐続者として、後者を具体的実在対象としての実在的個別性を欠く現象的耐続者として規定した。さらに、実体的対象の本質の一部である耐続性を貫時点同一性としての純粹生成として捉え、その実在性を時制や生成とともに三位一体的に擁護した。

研究成果の概要（英文）：

Based upon comparative considerations on several types of essentialism, I adopted 'the categorial power essentialism', which is basically a variety of the definitional essentialism based on real definitions but which also introduces some aspects of the dispositional essentialism and the minimal essentialism. Standing upon that position, I made real definitions of a hole and a rainbow, both of which are pseudo-substances. The former was defined as a dependent enduring that has the power of fillability. The latter was defined as a phenomenal enduring that lacks real individuality which is required for a real concrete object. Moreover I characterized the endurance, which is a part of essence of substantial objects, as the pure becoming regarded as the trans-moment identity and defended its reality together with that of tense and becoming.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学/倫理学

キーワード：形而上学、存在論、本質主義、耐続、時制、生成、穴、虹

## 1. 研究開始当初の背景

近年、現代形而上学研究の中で、「新ア

リストテレス主義的分析形而上学 (Neo-Aristotelian Analytic Metaphysics)」

ともいべき研究が隆盛の兆しを見せつつある。このタイプの研究の主たる特徴は、「第一哲学としての存在論」というアリストテレス的図式に沿った、存在論主導型の実在論的形而上学であるということである。

このような新アリストテレス主義的形而上学の形態として、アリストテレスによる本質と偶有との区別を復興させたいうえで特に本質の存在論的意義を重視する「新本質主義(Neo-Essentialism)」がある。これは、マーカス(R. B. Marcus)、クリプキ(S. Kripke)、パトナム(H. Putnam)らによる、様相論理の整備とその哲学的基礎付けや指示の固定性に関する言語哲学的考察によって先鞭が付けられ、その後、本質を重視する実体主義者であるラックス(M. J. Loux)、ロウ(E. J. Lowe)や科学的性質の傾向性を本質として捉える科学哲学者エリス(B. Ellis)、バード(A. Bird)らの他、ファイン(K. Fine)、オーダーバーグ(D. S. Oderberg)らによって、より存在論的な観点のもとで展開させられている。

また、新アリストテレス主義的形而上学のもう一つのタイプとして、メレオロジーや現代記号論理学などの形式的手法を用いながら存在論的研究を行う「形式存在論(Formal Ontology)」と呼ばれる研究もある。形式存在論は、フッサールに発するメレオロジー主導型とラッセルに発する記号論理学主導型という二種類の哲学的形式存在論と、その情報工学への応用としての工学的形式存在論に大別されるが、いずれにおいても多かれ少なかれ本質主義、総合的論理学観、常識実在論などの新アリストテレス主義的性格が見出せる。特に本質主義に関連しては、前述のとおり、様相論理に基づく形での種々の形式存在論的研究が展開しているが、必然性を本質の基礎とすることを批判するロウやファインは、それとは異なる独自の論理体系を構築している。

こうした背景のもとで、当研究者は、本研究に先立つ10年近く、実体に関わる形式存在論的研究を進めてきた。具体的には、平成13～15年度の科研費(基盤研究C2)による研究「時間論理に基づく形式存在論」および平成16～18年度の科研費(基盤研究C)による研究「種の様相論理に基づく形式存在論」によって、それぞれ実体の通時的同一性と貫可能世界同一性に由来するde re様相の論理とそれに基づく形式存在論的体系の構築を試み、その成果として、部分ディオドロス時間様相(命題)論理PS4.3および種の様相(述語)論理SS5にそれぞれ基づく、時間的実体様相と種の実体様相に関する形式存在論の骨格を提示した。さらに、平成19～21年度の科研費(基盤研究C)による研究「現代的実体主義の論理と存在論」においては、PS4.3とSS5をそれぞれ述語論理化

と部分論理化によって拡張し、それらに基づきつつ、特に実体の独立性に関する存在論的考察を行った。その結果として、実体の独立性とは、当該の実体が属する種の本質を規定する同一性基準において他の特定の個体が関与する余地がないことである、という基本的結論を得た。

しかしその場合、「本質」というものの適切な性格付けや、その客観性・実在性の確保が必要となる。また、特にファインによる本質に関する一連の著作に触れて、上述のような様相論理を中心とした実体概念の論理的基礎付けに関しても、主にその本質と関わる部分においての十全性について再検討を強く迫られることとなった。本研究は、本質に関するこれらの課題を、引き続き形式存在論に基づく分析形而上学的考察によって果たそうとするものであった。

## 2. 研究の目的

本研究は、「本質(essence)」というものの存在論的意義を重視する本質主義的形而上学を、現代的観点から再構築することを目的とした。

本研究における「現代的観点」とは、まず第一に、本質に関連する存在論的な論証を扱うために最も有効な現代記号論理の体系を創案し、それに基づいて本質主義的形式存在論の体系を構築することである。

そして第二に、本質主義を標榜する現代の代表的な分析形而上学者たちの諸説を比較検討しながら、本質の最も適切な存在論的性格付けを模索し、本質にまつわる存在論的諸問題に解答を与えることである。

## 3. 研究の方法

まずは、性質の必然性を基礎とするクリプキの本質主義、ファインやロウが提唱する定義的本質主義、マンフォードやエリスらが支持する傾向本質主義、マッキーが主張する最小本質主義などの本質主義のいくつかのバージョンについて比較検討しながら、当研究者自身が立脚すべき本質主義の内実の確定を試みた。

その結果として、基本的には実在的定義に基づく定義的本質主義に基づきながら、傾向本質主義や最小本質主義をも部分的に取り入れた、「範疇的力能本質主義」ともいべき立場を当研究者自身の立場として採用した。

それに基づき、事例研究のために擬似的実体としての穴と虹を採り上げ、その実在的定義や本質について考察した。また、実体的対象の本質の一部である耐続性に関する存在論的諸問題についても検討した。

## 4. 研究成果

(1) 必然的性質として本質を規定するクリプキの本質主義には必然的でありながら本質とは言えない性質を排除できない等の問題点があるので、当該の対象がそもそも何であるかを表す実在的定義を本質の中核に据える定義的本質主義を採用した。

そのうえで、傾向本質主義や最小本質主義のような極端な立場を退けつつも、それらによる力能の優位性や本質の上位レベル性の主張等は肯定的に捉えて取り込むことにより、具体的対象に関する「範疇的力能本質主義」を研究者の立場として採用した。

(2) 下記論文①②では、穴の存在論的本性について考察した。

多くの哲学者が穴という対象の存在を認めることを回避しようとするのは、穴という対象が、哲学のおよび科学的観点からはきわめて「不気味な物(spooky things)」に思われるからである。事態、事実、命題などによって示される「事柄」としての欠如に対し、多かれ少なかれ「実体的な」対象としての穴を承認することは、幽霊や天使などにも似た非物質的な実体らしきものの存在を承認するという点で、特に自然主義的・物理主義的立場からすると非常に抵抗が大きいのである。

これに対し、上記論文においては、穴という持続的对象は確かに種々の特殊性を持っているが、その特殊性は一種の「極限性」とでも言うべき類のものであって、必ずしも自然主義的・物理主義的立場に「対立」するような「特異なカテゴリー(sui generis)」の承認を要求するほどのものではないということを示した。

それを踏まえて、「穴とは、(諸)物体の補空間のうちその(諸)物体に外的に連結している部分に、その(諸)物体の形状や配置に依存して創発する充填可能性という力能(傾向性)を持つ非質料的耐続者である。」という穴の実在的定義を行った。

(3) 下記論文③では、非物体的でありながら実体的であるように思われるという特徴を共有する「鏡像」や「穴」などの「物もどき」と比較しながら虹の存在性格について考察した。

その結果として、虹が実在するのに対し鏡像は実在しないという大きな相違が両者の間には成立するように思われるにも関わらず、少なくとも存在論的な厳密さを期す限り、実体的であれ非実体的であれ、虹は鏡像と同様、そもそも具体的個体という意味での「対象」としては実在しないということを主張した。

その根拠は、特定の時点における特定の観測地点に対応する光の反射点の集まりによって形成される多色のアーチ形状の「太陽の化身」としての虹は、当該の水滴集団全体の

中から光源色の知覚に導かれて観測者が切り取ることとなった「恣意的(arbitrary)」断面部分に観測者が「創り上げた」ものにすぎないということである。

ただし、虹も鏡像も私たちが知覚に導かれて創り出した非実在的な「物もどき」であるという点では共通しているが、その非実在性の主たる所以は、虹の場合は実在的な個別化原理を欠いているという意味での一種の「形相性」の欠如であるのに対し、鏡像の場合は存在場所において物理的对象を欠いているという意味での一種の「質料性」の欠如であるという点で異なっている。

(4) 下記論文④⑤では、実体的対象の本質の一部である耐続性について考察した。

ジョンストン(M. Johnston)は、耐続的对象の内在的变化の問題に対して「副詞的解決」を提示した。ルイス(D. Lewis)は、それをコプラの時制化として解釈した。彼によれば、その解法は、単に属性を持つということに置き換えるという欠点を抱えており、それゆえにブラッドリーの無限後退に脅かされる。

当研究者は、属性を持つということが非関係的であるべきだという点ではルイスに賛成するが、それが「単に属性を持つ」ということに限定されるべきだという点については反対である。そのため、時制を耐続に関するコプラ的 de re 様相として特徴づけることにより、コプラを非関係的に、かつジョンストンよりも深い形で、時制化したうえで、さらに耐続を R. テイラーの「純粹生成」として規定する。

この方法は、時制・耐続・生成についての実在的説明と強く連携しながら内在的变化の問題に対処する点において、他の耐続主義者による解法よりもすぐれている。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 6 件)

- ① 加地 大介, 虹の本質——穴と虹と鏡像そして音——, 埼玉大学紀要(教養学部), 査読無, 48-1, 2012, 49-57. [http://sucra.saitama-u.ac.jp/module/s/xoonips/detail.php?id=KY-AA12017560-4801-04]
- ② 加地 大介, 時制・耐続・生成(1)——コプラを深く時制化する——, 埼玉大学紀要(教養学部), 査読無, 47-2, 2012, 123-144. [http://sucra.saitama-u.ac.jp/module/s/xoonips/detail.php?id=KY-AA12017560-4702-06]

- ③ Daisuke Kachi, Serious Copula-Tensing, Interdisciplinary Ontology, 査読無, 5, 2012, 67-73.  
[<http://sucra.saitama-u.ac.jp/modules/xoonips/detail.php?id=A3000343>]
- ④ 加地 大介, 書評:『時間様相の形而上学』(伊佐敷隆弘 著), イギリス哲学研究, 査読無, 34, 2011, 65-67.
- ⑤ 加地 大介, 穴の力, 埼玉大学紀要(教養学部), 査読無, 46-2, 2011, 55-71.  
[<http://sucra.saitama-u.ac.jp/modules/xoonips/detail.php?id=KY-AA12017560-4602-05>]
- ⑥ Daisuke Kachi, The Power of Holes, Ontology Meeting: A supplementary volume for 2011, February Meeting, 査読無, 2011, 7-12.  
[<http://sucra.saitama-u.ac.jp/modules/xoonips/detail.php?id=P0000209>]

[学会発表] (計5件)

- ① 加地 大介, 虹と鏡像—虹は実在するか—, 「メレオロジーとオントロジー」ワークショップ, 2013.1.13, 神戸大学(神戸市) .
- ② Daisuke Kachi, Endurance and Pure Becoming, Tokyo Forum for Analytic Philosophy, 2012.5.10, Tokyo University (Tokyo).
- ③ Daisuke Kachi, Serious Copula Tensing, The 5th Interdisciplinary Ontology Conference, 2012.2.23, Keio University (Tokyo).
- ④ Daisuke Kachi, The Power of Holes, ONTOLOGY and ANALYTIC METAPHYSICS Meeting, 2011.2.24, Keio University (Tokyo).
- ⑤ 加地 大介, 「穴」の力, ECOTEC 第二回定例研究会, 2010.12.27, 東京大学(東京都) .

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

○取得状況 (計0件)

名称:

発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

[その他]  
ホームページ等  
[研究者ホームページ]  
<http://www.kyy.saitama-u.ac.jp/~kachi/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加地 大介 (KACHI DAISUKE)

埼玉大学・教養学部・教授

研究者番号: 5 0 2 5 1 1 4 5

(2) 研究分担者

( )

研究者番号:

(3) 連携研究者

( )

研究者番号: